

あなたのなかに神がいる： 17世紀イングランドにおけるヤーコプ・ベーム

富 樫 剛

ドイツの職人・商人・神秘思想家ヤーコプ・ベーム（Jakob Böhme [Boehme, Behmen], 1575-1624; ドイツ語では「ボァーマ」と聞こえる）がここ20年ほど注目されてきている。特にロンドン大学のアリエル・ヘサヨン（Ariel Hessayon）がジェラード・ウィンスタンリー（Gerrard Winstanley, bap. 1609, d. 1676）、ランター（「暴言族」）およびクエイカー（「友の会」会員）らとの関連で研究を進めてきており、『ジェイコブ・ベーム入門』のような入門書も編集している（Hessayon and Apetrei）。

しかし困ったことに、このような入門書を読んでもベームの思想はわからない。わかった気になれない。ナイジェル・スミス（Nigel Smith）は上記『入門』に寄せた論文のタイトルにて「ベームを理解できた人はいるか」と問い、今の研究者にとってはベームの著作そのものより周辺の人々・ことがらのほうが面白い、と言う（Smith, “Did” 100）。が、そもそも現状の研究ではそのより面白いはずの周辺も十分には見えてこない。

17世紀のイングランド人にとってもベームの著作は難しかった。ケンブリッジ大学の公開討論でベームをとりあげたチャールズ・ホサム（Charles Hotham, 1614-1672）のラテン語論文を英語に翻訳したダニエル・フット（Daniel Foote, 生没年不詳）は序文でこう語る——「ベームを読んでいると断崖絶壁に立っているかのように目がくらくらする。あるいは大砲を喰らって脳みそがぶっ飛んだような気分になる」（Hotham A3v）¹。ベームの著作のダイジェスト版『ドイツ新聞』（*Mercurius Teutonicus*）の序文にはこうある——「ふつうでない用語や表現があっても、嫌ったり、馬鹿にしたり、ケチをつけたりしないでほしい。理解できなくても非難には値しない。なぜなら、誰でも自分の言っていること以外、

1 この翻訳者は従来ホサムの弟デュラント（Durant）と見なされてきた（Smith, “Did” 107, 117n55）。以下、日本語訳はすべて筆者による。紙数の関係で、特に重要な箇所以外原語・原文は省く。

よくわからないものだから」(Böhme, *Mercurius* A3r)。無免許医師・無資格牧師——DNBの記載は「外科医、宗教指導者」——ジョン・ポーディッジ (John Pordage, bap. 1607, d. 1681) は言う——ベームを「理解している人はほとんどいない。だいたいみんな勘違いしている」(Pordage 108 [2nd pag.])²。

このように難解な、その出版に携わった者たちすらよくわかっていないような、ベームの著作が1640-50年代に人気を集めたのはなぜか？なぜほとんどすべての著作が英語に訳され、例えばミルトン (John Milton, 1608-1674) が多く所有し、神学者・哲学者ヘンリー・モア (Henry More, 1614-87) が好意的な言葉を残すほどの評価を得たのか³？これらの問いに答えるべく、本論考ではベームの『解説：神の本質の三原理』(*A Description of the Three Principles of the Divine Essence*, 1648) 第10-12章の再読・再考を内容・文脈の両面から試みる。

1. 両性アダムのなかに神がいる

ベームの議論のうち重要かつ刺激的なものとして、まず両性具有のアダムについて考える。『三原理』第12章における記述の概要は以下のとおりである⁴。神は人——“Adam”とはヘブライ語で「人」——をつくり、自分の霊 (spirit) を彼に与えた。人に宿るこの神の霊をベームは「汚れを知らない処女」と表現する。曰く、「おかしな欲望を抱かない人のなかには最高に完璧な神がいる」。同時にアダムのなかには「この世の霊」もいて、これが「若くてかっこいい、美しい」青年である。この「男女」二種の霊が宿っているがゆえに最初の人アダムは両性具有ということになる。アダムのなか、二つの霊が「いっしょになっていた。ひとつの腕のなか、抱きしめあっていた」のである。

この二つの霊についてベームは叶わぬ(男視点)、あるいは暴力的な(女視点)、恋の物語をつくる。処女は「神の心を求めている、おかしな妄想を抱かなかった」が、青年のほうは「処女に対して恋の炎を燃やしていた。欲望を抱き、彼

2 ポーディッジについては Raymond ch. 5 も参照のこと。

3 ミルトンはベームの本を、下にとりあげる『三原理』を含み9冊所有していた(Boswell 35-37)。モアについては Hutton を参照。

4 該当箇所全訳についてはベームを参照。

女と交わりたいと思っていた」。以下、そんな二人のやりとりである。

青年：

この世でいちばん愛しい君、ぼくの妻で花嫁の君、天国や薔薇の冠のような君、ぼくを君の天国に入らせて。君のなか、赤子のように宿りたい。君の本質をぼくのものにしたい。君に愛されて気持ちよくなりたい……。

処女：

確かにあなたはわたしの花婿・配偶者。でもあなたは宝石でわたしを飾ってくれない。わたしのもっている真珠のほうがあなたより大事。わたしの美德の力は腐敗を知らないし、わたしの心はいつも一途。あなたの心は浮気をするし、あなたの力は腐敗する。……わたしの真珠は絶対にあげない。だってあなたは闇で、わたしの真珠は光り輝いているから。

青年：

……お願い、ぼくを慰めて。ぼくと交わって妊娠するのが嫌なら、せめて君の真珠をぼくの心に埋めこんで。それをぼくのものにして。君はぼくの金の冠になってくれないの？ 君の果実を本当に味わいたい。

処女：

……もう、欲望が丸見え。そんなにしたいの？ でも、わたしは処女でああなたは男。さわられたら真珠が汚れる。冠が壊れる。わたしの優しさがあなたの意地悪と混ざってしまう……。

青年：

君を逃がさない。ぼくとしてくれないつもりでも、力づくで君を好きにしてやる。力任せに。君を太陽と星と風火水土の力で包んで誰にも見えなくしてやる。これですと君はぼくのもの……。

処女：

どうして乱暴するの？……わたしは光であなたは闇。ほら、わたしがあなたに包まれたら、もうあなたは光らない。そうなったら、もうあなたは暗い蛇。……宝石をあげる。それで我慢して。わたしの果実を食べさせてあげる。それがわたしの優しさ。でもあなたにわたしと交わる資格はない。わたしの本質は神の力、それがわたしのきれいな真珠、輝くわたしの光の源、わたしの永遠の泉。あなたがわたしの光を暗くしたら、わたしがあげる服を汚したら、もうあなたに光はない。もうあなたは生きられない。あなたの蛇があなたを滅ぼす……。

青年：

君の宝石はもうぼくのもの。ぼくは君を好きなようにする。君はぼくが腐敗する、滅ぶと言うけれど、ぼくの蛇には永遠の命があって、それがぼくの支配の道具。それからぼくは君のなかに宿ってやる。君にぼくの服を着せてやる。

処女 [神に向かって]：

わたしの心、愛しい方、わたしの力の源の神さま、わたしはあなたから透明に輝く者として生まれました。あなたの根から、永遠の世界から、わたしはつくられました。そんなわたしを闇の蛇から助けてください。この蛇のせいでわたしの夫は病気なんです。毒されているんです。誘惑されているんです。わたしを闇に埋もれさせないでください……。

神：

女の種が蛇の頭を砕くであろう。

(Böhme, *Description* 108-10)

……唐突な展開だが、ベームが解説してくれる——「女の種が蛇の頭を砕く」という言葉が意味するのは、「闇の蛇が男から切り離される」こと、「蛇が男に着せる闇の服、処女の真珠と美しい冠を翳らせる闇の服」が「破られ、破壊さ

れ、そして土に還る」ことである——処女は神の下に帰り、そこで「夫と幸せになる」——「これが永遠なる神の意思・意志であって、必ず実現する」（110-11）。

……やはりよくわからないので、処女と青年の話は少し忘れて、同書の第10章「人の創造、魂、神が人に命を吹き入れたことについて」を参照してみる。「あなたは土であり、土に還ることになる」と神はアダムに言う。ベーム曰く、この「土」はただの土ではない。それは「神土」(*Limbus*)、墮落前の人の肉体をつくっていた天国由来の素材である⁵。この神土が墮落によって変質する——「エデンの園でこの世の土から実った林檎をかじった時からこの世の土の支配がはじまった」。通常の墮罪の話の変奏である。しかし、やはり「神土からの魂が聖霊によってアダムに吹きこまれていたので」、慈悲深い神は「神土を髓としてみずから肉体となり、もともと人のなかに隠れていた魂のなかに新しい人を創造」した。「古い人」はいずれ腐敗していく。が、この「新しい人」は永遠に生きる。「神の意図とは、彼の最初の似姿が再びやってきて楽園に生き続ける」ことである (*Böhme, Description 77-82*)。

おそらく、これは両性具有の話と同じことを語っている。「汚れを知らない処女」と「神土」——つまり、もともとアダムのなかにいた神の霊とその素材——は同系統のものである。アダムのなかの青年あるいは「この世の霊」、およびそれに取り憑く「闇の蛇」と、滅ぶ体をなすふつうの「土」についても同様である。つまり両性具有の物語でベームが示しているのは、もともと人には神の霊が与えられていたこと、この霊が現世的な欲望によって失われること、そしてそれがいずれ回復されて人は再度霊的存在となること、つまり永遠に生きること、である。人の創造、墮落、イエスによる救済、天国における永遠の生という正統的なキリスト教教義と重なりつつ逸れる、逸れつつ重なる、そんな独自の神話をベームはつくり、語っている。

5 ベームの特殊用語については、*Jacob* および *Böhme, Genius, Introduction* を参照。

2. 分離派信徒のなかに神がいる：内乱・共和国期

1640-50年代のイングランド人は両性のアダムに何を見たか？上記の議論が内乱・共和国期に人気・関心を集めたのはなぜか？以下、当時の社会について考える。

当時、穏健なイングランド人を悩ませていたのは、イエスの贖罪によって十戒を筆頭とする旧約の律法が完全に無効化されたという反律法主義(antinomianism)や、そこにとどまらず聖書全体の真理性や権威を否定する反聖書主義(antiscritpturalism)の台頭であった(Hessayon, "Not"; Hill)。反律法主義には、国教会聖職者トバイアス・クリस्प(Tobias Crisp, 1600-1643)の説教に見られるように放蕩・無法行為を戒める常識的な立場もあったが⁶、より顕著であったのは、トマス・エドワーズ(Thomas Edwards, c.1599-1648)が『壞疽』(*Gangraena*, 1646)に列挙した極端で反社会的な諸思想であった。数例のみあげる。

66. 道徳律はすべての信者に適用されるわけではない。信者は道徳律に従わなくてもいい。道徳律に照らして生きかたを省みなくていい。キリストを信じる者にこの法の強制力は及ばない。
79. 神のこどもたちは犯した罪について許しを求めてはいけない。その必要はないからすべきではない。許しを求めることは神に対する冒瀆である。
128. 説教師は学ばなくていい。本や学問は廃止すべきである。

人を殺すこと、姦淫すること、人のものを盗むことは罪ではない。

(25-26, 30; Edwards, *Second* 8)。

実際にこう主張していたのは、例えば、今の歴史研究ではランターに分類されるローレンス・クラクソン(クラックストーン、Laurence Clarkson, *pseud.* Claxton, 1615-67)である⁷。曰く、「悪人の祈りが神にとって忌まわしい」⁸ように、

6 クリस्पについては Crisp および *DNB* を参照のこと。

人の行為の意味を決定するのはその人のありかたである。だから、「罪なく光のなか生きている人」が神の名において罵っても、泥酔しても、姦淫に耽っても、人のものを盗んでも、罵り泥酔し姦淫し窃盗していることにならない。「神は愛で、愛は神で、だからすべて無罪、すべて光で」、人のなかには「一点の汚れもない」。だから、「光のなか、愛のなかで君がすることは、すべて光に輝き、美しい。たとえ姦淫と呼ばれる行為であろうと、それは闇のなかにおいてのみそうなのであって、光のなかでは誠実である」。逆に、もし何かをして心のなかに疚しさを感じる如果能够あれば、自分でそれが罪だと感じるのであれば、「自分の心が自分を拷問にかけるのであれば」、それこそが罪、「永遠の不幸」である。つまり、「聖書や聖人や教会が何と言おうと、君のなかの何が君を有罪と咎めないのであれば、君が罪に問われることはない」(Claxton 10-12)。

並列してクラークソンが説くのは、「人のなかに神がいる」ということである。曰く、「神がすべてのもののなかにいるなら、当然すべての人のなかに神がいることになる。信心深い人にも、邪悪な人にも。であるなら、悪人が善人より悪いということはありませんか？」——「もし神が敬虔な人と同様邪悪な人のなかにもいるなら、敬虔な人は救われて邪悪な人は救われないということがどうしてありえよう？」(Claxton 16)。同じくランターとされるジェイコブ・ボトムリー (Jacob Bauthumley, 生没年不詳) も同様に論じる——「神は自分がつくったものすべてのなかにいる。人のなか、獣のなか、魚のなか、鳥のなか、緑のものすべてのなかに。……神はこれらすべての命であり、存在そのものである。そこには神が、言うなればそのまま神自身として、いるのである」——「存在するものはすべて神である」——「人のなかに神がいるかぎり、人をつくったのが神であるかぎり、人とは神である」(Bauthumley 4, 35)。

このような議論の横溢およびそれに由来する反社会行為・犯罪を防ぐべく定められたのが1650年8月の冒瀆禁止法である。「悲しく驚くべきことに、男女を

7 ランターが本当に集団として存在したかを問う Davis も参照。エドワーズはクラークソンを「真理探究派」(seeker) と呼ぶ (Edwards, *Second* 7)。

8 聖書中の言葉は、「悪人からの捧げものは神にとって忌まわしい。正しい人の祈りを神は喜ぶ」(箴言 15: 8)。これが昔からしばしば本文にあるように言い換えられてきた。

問わず尋常ならざる考えを抱き、道ならぬ忌まわしき悪事に耽る者がおり、その伝播によって社会が腐り、乱れ、壊れかねない状況」であるから、議会は、「規範を破る者、良心の自由を濫用して過剰・過激な行為に走る者に対して強い不快感・憎悪を抱いていることを正式に表明」せざるをえなかった。以下、対象者の例である。

自分または他の誰かが神・無限者・全能者である、榮譽・能力・地位・力において真の神と同等もしくはまったく同じである、あるいは自分または他の誰かのなかに永遠に最高の支配権をもつ真の神がいる、などと発言または書によって断言・主張する者(病や脳の障害によって平常の思考を失っている者は除く)

冒瀆的に神の名において罵ること、酒に溺れること、汚らわしい獣のような行為に耽ることは清らかなことであって神の言葉によって禁じられていない——誰がおこなおうとこれらのことは、誰であれこれらをおこなう人は、神によって褒められる——これらの人はまるで神のようであり、これらの行為はまるで神の行為のようである——などと、前述同様発言・書によってあつかましくも主張する者

(売買春であれ、姦通であれ、深酒であれ、その他どんな悪事であれ)自分がおこなうことに罪はない——これらの行為をおこなうのは自分のなかにいる真の、最高の支配者である神あるいは永遠に不死なる魂である——最大の罪を犯して最小限の後悔や罪悪しか感じない者こそ永遠の神とも見紛う最高に完璧な人である……——などと前述同様発言・書によって主張する者 (Firth and Rait 409-12、強調筆者)

つまり、バーメのアダム両性説は単体で1640-50年代のイングランドに広まっていたのではなかった。「人のなかに神がいる」という彼の思想は、むしろあちこちで目にする・耳にするもの、そして犯罪・反社会行為をもたらしとして規制されるものであった。そんな問題言説の一変奏、しかし独自の魅力をもつ

大陸由来の新しいキリスト教教義論として、ベームの両性アダムは受容されていたのである。

3. 「愛の家族」信徒のなかに神がいる：16-17世紀

ベームが「人のなかに神がいる」という考えをイングランドにもたらしたのか？ 違う。そのように大陸で説いていたのはベームだけでないし、またベームの著作が広まるはるか以前から、この思想はすでにイングランドに広まり、しばしば批判的な注目を集めてきた。

特に重要なのは、16世紀のオランダで「恵み深き聖なる言葉を光のなか広く伝えるべく神に選ばれて」、「愛の家族」または「愛の家」(the Family of Love, the House of Love)なる分派を創始した幻視者ヘンドリック・ニクラエス(Hendrik Niclaes, Henry Nicholas, 1502-c. 1580)である。彼は、「神とともに神になった」(“Godded with God”)特別な人、「神の存在と一体となり、神とともに勝利し、支配する」人の優越を説く——「神は人とともに人となり、人は神とともに神となり、この世のすべてを支配する」——「神は人の魂が健全であることを求める。それは……みずから人に宿るため、生きるためである。また、人が神のなかに生きるためである」(Niclaes, *Revelatio* D1r-D2r [25-26])。このような彼の著作はすでに1570年代に英語訳出版されており、信奉者はイングランド各地に広がっていた。1580年に女王エリザベス1世(Elizabeth I, 1533-1603)は「教養のない愚かな人々」を「狡猾な嘘で騙し、自分は他よりも清らかで完璧な存在であると信じこませる」「呪わしい異端」として愛の家族を糾弾する布告を出している(Moss 22ff., 47ff., 74ff.; Rogers)。

が、そんな糾弾・弾圧を超えてこの教派は生き残る。彼らは王ジェイムズ1世(James VI and I, 1566-1625)に対して自己を弁護する請願を書いて1606年に出版し、フランシス・ベイコン(Francis Bacon, 1561-1626)の著作にはこの請願への言及がある。ロバート・バートン(Robert Burton, 1577-1640)の『憂鬱の解剖』(*The Anatomy of Melancholy*, 1621-1651)は愛の家族を他の教派とひとくくりにし、「礼儀も文字も知らない、思いこみの激しい馬鹿な奴ら」と呼んでいる(qtd. in Moss 54ff.)。トマス・ミドルトン(Thomas Middleton, bap. 1580,

d. 1627) は文字どおり『愛の家族』(*The Family of Love*, 1608) と題された劇を書いて、やはり諷刺している (Moss 55, 24)。

逆に40年代の内乱期になると、国教会の混乱と崩壊、検閲制度の瓦解などにもない、愛の家族の思想や声により大きく社会に響くようになる。愛の家族信奉者、あるいは「人のなかに神がいる」という愛の家族の思想をもつ者として今でも名前のあがるジョン・エヴァラード (John Everard, 1584?-1640/41)、ジャイルズ・ランドル (Giles Randall, 生没年不詳)、ジョン・ソルトマーシュ (John Saltmarsh, d. 1647)、リチャード・シップズ (Richard Sibbes, 1577?-1635)、ウィリアム・アーバリー (William Erbery, 1604/5-1654)、ウィリアム・ウォルウイン (William Walwyn, bap. 1600, d. 1681) らの活動が目立つように、記録に残るように、なるのである (Moss 58ff.; cf. Smith, *Perfection* chs. 3-4; Hill)。

こうして、1640年代末から50年代にかけて愛の家族の創始者ニクラエスの著作の英語訳が再び大量に刊行されるようになる。上に見た内乱・共和国期におけるベーメの翻訳出版は、オランダ由来の、そして「人のなかに神がいる」という同種=同趣・同様の主題を説く、愛の家族の出版物と同じ文脈に位置づけられるのである (cf. Smith, *Perfection* ch. 5)。だから、ベーメの思想がランターらの反律法主義・反聖書主義に影響を与えた、という単純な議論は成立しない。16世紀以来、オランダ由来の愛の家族思想およびその各種変奏によって用意されてきた土壌で、ドイツ由来のベーメの著作の英語訳、自国産の反律法主義・反聖書主義、そして甦ったニクラエスの英語訳が、おそらく互いに影響を与えあい混淆しながら共存していたのである⁹。

さらにもうひとつ同時期に英語訳されたものとして忘れてはならないのが、いわゆるヘルメス文書 (の一部)、ヘルメス・トリスメギストス (Hermes Trismegistus) の『ポイマンドレス神』(*The Divine Pymander*, 1650 [1649], 1657) である。その序文にあるように、これは「モーセの生まれる何百年も前に書かれた」著作であり、「聖書を除くこの世のどの本よりも神や自然に関する正しい知識を与えてくれる」ものであった (A2r, A5v)。その正しい知識とは、やはり「人のなかに神がいる」ことである。第4巻「鍵」のなか、ヘルメスは言う——「人は神のような生きものであり、地に生きる野の獣と比べてはいけません。むしろ天にいて神々と呼ばれる者にたとえられるべきです」——「本当の

意味で人と呼べる者は、神々以上の存在、少なくとも神々と同じ力をもつ存在です。なぜなら、天にいる者たちは地に降りてきませんが、つまり天地の境界を越えることができませんが、人は天に昇ることができるからです。天を旅することができるのです」——「この世の人はいずれ死ぬ人でありながら神です。また、天の神とは不死なる人です」（60）。

ゆえに上の議論にさらなる修正が必要である。オランダ由来の愛の家族思想およびその各種変奏によって用意されてきた内乱・共和国期の言説土壌では、ドイツ由来のベームの著作の英語訳、自国産の反律法主義・反聖書主義、甦ったニクラエスの英語訳、そしてエジプト・ギリシャ由来のヘルメス文書が、おそらく互いに影響を与えあい混淆・混乱しながら共存していた¹⁰。ベームもニクラエスもヘルメスも、みな「人のなかに神がいる」という議論・思想に、先進（と見なされうる）文化圏の生産物のみがもつ知的・美的権威——平たく言えば、正しさや恰好のよさ——を付与していたのである。

ちなみに『ポイマンドレス神』の翻訳者は前述のエヴァラードであり、またベームの代表作『夜明け』（*Aurora*, 1656）を出版した書籍商ジャイルズ・カルヴァート（Giles Calvert, bap. 1615, d. 1663）はニクラエスの著作の再刊、ソルトマーシュヤクラークソンの著作の出版に関わっていた（*DNB*, “Calvert, Giles”;

9 ヘサヨンは、ベームからランターあるいはクエイカーへ、という影響関係を一貫して否定する。これはおそらく半分正しく、半分誤りである。ヘサヨン曰く、ボトムリー、クラークソン、アビーザー・コップ（Abiezer Coppe, 1619-1672?）らランターたちの「現存する著作はベームにまったく言及していない」——ランターたちに対する同時代の批判のなか、彼らが「バラケルススや……ベームの教えを受け継いだという話が一切出てこないのは重要だ」——コップの最初の著作「甘い霊のワインをどうぞ」[*Some Sweet Sips, of Some Spirituall Wine*]には、はっきりベーム的と言える議論が見られない——ジョウゼフ・サーモン（Joseph Salmon, fl. 1647-1656）の言葉は「ベームに似ていない」（Hessayon, “Ranters” 86-87, 91）——「初期クエイカーの出版物や手稿のうち、ベームの用語や教えについての知見が窺われるのはほんの一部にすぎない」（Hessayon, “Jacob” 89）。このようにベームからランターやクエイカーへ、という明確な影響関係が窺われないのは、前述のように彼らの議論が「愛の家族以来の同系統言説」という関係にあるからである。大陸＝宗教改革先進国由来のもので——つまり知的で恰好いい雰囲気をもち——内容的に知識層に訴えるところのあったベームの著作は、やはり模倣したいと思わせる新しい何かをもってはたはずである。Cf. Turner 142-49.

10 ヘルメス文書については *Hermetica*, Introduction も参照。

“Giles”)。これらの著者・翻訳者・出版関係者の言わば共同作業により、複数の起源をもつ「人のなかに神がいる」という議論が17世紀半ばの主要言説および一大社会問題となっていたのである。

4. あなたのなかに神がいるならば：霊人の生理学

「人のなかに神がいる」という考えは宗教思想や社会問題にとどまらなかった。科学・生理学的に、ペーメは墮落以前の霊的な人の生誕まで考える。曰く、霊そのもの、「神の真の似姿、神の現し身」であったアダムの体のなかに肉々なものは存在しなかった——彼に「硬い骨はなかった。それはむしろ神から与えられたある種の力そのものであった」——「アダムの血はこの世の水の髄液（Tincture）ではなく、天国の『神質』（Matrix）の髄液でできていた。復活の日にわたしたちの血もそうなるであろう」。食べるもの・飲むものも今とは違った——「彼の食べものはすべて天国の食べもので、飲みものも永遠の生の泉から湧き出る天国の水の母によって与えられるものだった」。禁断の木の実のみならず、アダムはふつうに「地上に実る果実」も食べてはならなかった——「確かに食べる必要はあったが、入れていいのは口までで、体に入れてはいけなかった」。なぜ？ まず、「その成分には腐敗のものが含まれていた」からである。また、そもそも霊人アダムは「胃腸を、今のような堅くて暗い肉体を、もっていなかった」からである——「今の人が体内にもっているような悪臭を放つ汚らしい器官など、楽園のものではない」——「どうしてそのような（今わたしたちの体内にある）糞や悪臭が神のように清らかな楽園に存在できようか？」（Böhme, *Description* 78-82, 91-92）。

同様に、性も楽園に存在しない・できない・すべきでない——アダムは「不死なる者、聖なる者」、「天使のような存在」、「神土でつくられた……純なる者」であったから、「獣のように子孫をつくるための部位をもっていた、と考えてはならない」——墮落後にはじめて「彼は自分が獣のような姿をしていることを知り、その瞬間に獣のような生殖器官を手に入れた」（Böhme, *Description* 78-82, 91-92）¹¹。

この宗教的かつ自然哲学的な議論を17世紀の文脈のなか相対化するために、同

様に宗教的かつ自然哲学的な文学・芸術作品であるミルトンの『失楽園』(Paradise Lost, 1667, 1674)と比較する。ベームと違ってミルトンは、墮落前のアダムを「部分的に霊」とする(5: 405-6)。霊でない部分は肉であり、だから彼はふつうに食べる。第4巻、はじめて登場する場面でアダムとイヴは庭仕事をし、「健全な空腹と喉の渇きを感じ……夕食として果実にかぶりつく」(4: 328-31——「かぶりつく」は“fell”)。ミルトンのアダムの体内には「悪臭を放つ汚らしい器官」がありそうである……が、ミルトンはこれら器官の実際の働きにふれない。むしろ、天使ラファエルの口を通じてその働きを霊化する。食べものは消化吸収されて不要な部分が排泄される……のではなく、体内で「かたちあるものからかたちのないもの」へ、つまり霊的なものへと変化する——大地は海に摂取されてその栄養となり、その大地と海はともに空気に、空気は月の光に、月の光は他の星たちの光に、それぞれ吸収されて変化する、というように(5: 413-22)。

ミルトン曰く、この食べものの消化=昇華は天使の体内——むしろ「霊内」——でも起こる¹²。ラファエルは、アダムがためらいがちに——「霊であるあなたにはおいしくないかもしれませんが……」——と言って——ふるまう「神の力によって大地に実った恵み」に「かぶりつく……本当にお腹がすいていたかのよう」(5: 401-2, 434, 437——「かぶりつく」はここでも“fell”)。曰く、

部分的に霊である人に

神が与える食べものは……

最高純度の霊にとっても

ありがたいものです。食べものは必要です。わたしたちはまったく肉をもたない、五感では知覚できない存在ですが、理性と肉をもつ人と同じと言えば同じです。人にも天使にも

11 『大神秘』(Mysterium Magnum, 1654)において、性器は「獣だけがもつような、腸のなかの死んだ蛆虫」(“bestial wormes-carkass of the bowells”)であり、「だから哀れな人々は今でも恥ずかしい思いをしている」(85-86, 78)。ターナー曰く、“wormes-carkass”は本来“maggot-bag”(蛆虫袋)と訳すべき、とのこと(Turner 145)。

12 ミルトンの天使に関する以下の論述については Fallon 141-47; Raymond 280-83 も参照。

知性・理性以下の感覚機能があって、それで音を聞いたり、ものを見たり、においをかいだり、ものにふれたり、味を感じたりします。味わって食べたなら消化し、分解し、そして吸収します。こうしてかたちあるものがかたちのない霊的なものになるのです。

(5: 404-13)

ミルトンは肉と霊を峻別しない。肉をもつ人の体内作用を霊化し、同時に霊である天使を一部肉化する。こうして食や消化=昇華機能は肉と霊が共有するもの、両者の交錯点に位置するものとなる。そもそもミルトン曰く、人も天使も——それぞれの「理性」について言葉だが——「種としては同じ」で、その違いはあくまで「程度の違い」である。だから、一定の宗教的・道徳的条件を満たせばアダム（やその他の人）は完全に霊化する——「神に対して従順であれば、また神を堅く、変わることなく、心をすべて捧げて愛し続ければ」、「もしかしたら体のすべての部分が最終的に霊になれるかもしれません。長い時間を経て改善されていき、羽が生えて天上に舞いあがっていけるかもしれません」(5: 496-502)¹³。

同様に、性の扱いにおいても霊と肉が交錯する。『失樂園』第4巻にはじめて登場した時から、墮落前のアダムとイヴは「獣のように子孫をつくるための部位」をもっていた。が、ミルトン曰く、その「不思議なからだの部分も、この頃はまだ隠されてはいなかった」。なぜ？それが善いもの、人にとって「いちばんの幸せ」をもたらすものだったからである。これが墮落前の話であり、「まだ罪の意識とか、恥とか、醜いとか、みだらとか、自然がつくり与えたものについてそんな考えかたはなかった」から当然、と説明できるように見えるが、実は違う。ミルトンは嘆く——性の禁忌、アダムとイヴの「罪から生まれた美しくない偽の道徳」が「どれだけ人々を苦しめてきたことか、ただの見せかけ、汚れのないふりを強いることによって！ いかにも人々の暮らしからいちばんの幸せ、偽りのない、一点のしみもない、そんな無垢な喜びを奪ってきたことか！」(4: 312-18, 736-75も参照)。「偽の道徳」さえなければ、「一点のしみもない」

13 5: 469-90 の註および Raymond 69 も参照のこと。

性行為による霊的な至福感を墮落後の罪深い人間でも得られるはず、ということである (cf. Turner chs. 1-2)¹⁴。

また、胃腸をもたない天使に楽園の果実を与えたように、生殖器官をもたない彼らにミルトンは愛しあう喜びを与える。「天国の霊の皆さんは愛しあわないのですか？ どうやって愛を示すんですか？ 見つめあうとか、光で交わるとか、体がないのにふれあうとか、霊が直接重なるとか、そんな感じですか？」と興味津々なアダムに対し、ラファエルは「天国の薔薇色」に頬を染めて答える——「天使たちが抱きあう」時は「空気と空気のように自然に交わるから邪魔は入らない、かな」——「肉も罪ももたない者同士の欲望とか交わりとか、そんな感じで考えて」(8: 615-28)。

このように人と天使が共有しうる、肉と霊の重なる地点に位置づけられた「いちばんの幸せ……無垢な喜び」を本当に肉ある人が享受するには、やはり一定の条件・基準を満たすことが必要である。「称えよう！ 夫と妻の愛を！」(“Hail, wedded love!”)——つまり、婚姻内のものであること、宗教・道徳・法的に「正しい」こと、体しかもたない「獣の群れに蔓延する快樂目的の欲望」に駆られたものでないこと、である (4: 748ff.)。だからミルトンは、墮落前のアダムとイヴの——ひいては墮落後のすべての夫婦の——性器・性欲・性行為を理想化して称えつつ、天使間の愛と並列しつつ、墮落後に醜悪したアダムとイヴの行為、「愛のお遊び」(“love's disport”, “amorous play”, 9: 1042, 1045) は善からぬものとする。サタンと〈罪〉のあいだ、また〈罪〉と〈死〉のあいだの近親相姦も、悪く醜く描く (2: 761-67, 790-802)。これらがそれなりに魅力的・魅力的に見えるとしたら、それはミルトンの筆力の証であろう。あるいは私 (たち) が醜く墮落しているからであろう。

以上のようなベームとミルトンの違いは、霊・肉を峻別する二元論か・そうしない一元論か、霊の優越を説くプラトン (Plato, 424/3-347 BC)¹⁵以来の形而上学的な観念論か・ホップズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) らを軸に17世紀に広まった唯物論か、という対立として学術的・自然哲学的に考えるべきかもし

14 ベームについて Turner ch. 4 の議論も参照。

15 生没年は Nails 1 による。

れないが¹⁶、ここではあえて別の見かたをしたい。ベームとミルトンでは消化・排泄・性欲・性行為という人体機能やそれに関する各器官についての考えや立場が違う、言説におけるこれらの扱いに関する好みが違う、と考えたほうが、より私たちの日々の現実やそれともなう関心・不安に近いのではないか。17世紀においても現代においても、文学・芸術作品や宗教・道徳論説の作者・読者の発想に近いのではないか。

例えば、ベームとミルトンの排泄しない理想の人に特筆すべき点は、実はない。過去のものでも今のものでも、（特殊な性格・趣向・目的ものを除く）多くの作品——詩・演劇・小説・映画・マンガ・TVドラマ・アニメなど——において登場人物は排泄しない（特に大）。あえて言うなら、特徴的なのはベームが飲食・消化機能やそれに必要な内臓まで墮落前のアダムから奪っている点である。ミルトンのアダムと天使は食べる。古今東西、過去・現在の無数の著作・作品中の人物も食べる。が、ベームの両性のアダムはまさに神の霊であり、「腐敗のもと」を含むこの世のものは一切摂取しない。そんな霊人・超人・「脱一人」がベームの理想である。肉としての人に欠かせない食を否定するベームは、身体其自然現象・必然・現実を嫌い、抹消する——例えば体毛・体臭の完全除去を試みる——今の美容（?）・医療（?）の最先端（?）のはるか先を行く。文字どおり霊・魂しかもたない状態が彼の理想、人の目指すべき姿である。

性について言えば、「両性」の点を除いてベームの霊人に特筆すべき点はない。古今東西、過去・現在の各種の著作・作品は、しばしば人から性的欲望や機能を奪う。現実に私たちもみな、日々、日のあたる場所では、「脱性」したかのような虚構を生活している。恋愛・性行為を著名人、いわゆる「アイドル」らに禁じる（?）一部の（?）風潮を見てもいい。ミルトンのように正面から、しかし扇情以外の目的で、性を扱うこと、それを理想化し賛美することのほうが稀である。

こう考えると理想の人の扱いについてベームとミルトンは対照的・対極的であるように見えるが、ひとつ重要な点で同等である。彼らの題材はともに墮落前のアダム、つまり聖書に基づく宗教言説である。ジェイムズ王聖書の序文に

16 一元論者・唯物論者としてのミルトンについては Fallon を参照。

あるように、聖書とは「神の言葉、神の約束、神のお告げ、真理の言葉、救いの言葉」であった。「地上ではなく天に由来し、人でなく神が著し、使徒や預言者の知恵ではなく聖霊が言葉にしたためた」書物であった。人の思考・生活や社会のありかたを左右し決定する・しなくてはならない、そんな「反逆精神を取り締まる有益な法の大全……永遠の生に向かって湧き出てあふれる純水の泉」、それが聖書なのであった (*Holy*, “Translators to the Reader”, n. pag. [このセクションの第3ページ])。また、科学的に言えば、聖書は「おかしな空想・妄想」の対極にあり、そこに「嘘や誤りはなく」、「わたしたちはそれを文字どおり読まなくてはならな」かった——「科学の問題はすべて聖書に従って解決すればいい、人はもっと慎み深くなって、科学の問題についても聖書の言葉、聖書の言うことをそのまま信じていればいい」(Ross 13)。つまり、ベームとミルトンの理想の人は、ともに多少なり、あるいは相当程度、法的・道徳的・社会的・科学的真理として提示されていると、またそのようなものとして読まれたと、考えなくてはならない¹⁷。完全なる虚構を前提とする過去・現在の諸作品に登場する者たちとは、地位や質が異なるのである。

しかし、あるいはまさにそれゆえ、結果は対照的であった。今日の目に虚構としか見えないほど独創的で非現実的で非正統的なベームの著作・思想は、虚構の枠を超えて現実の社会問題の一因となった。『失樂園』はそうはならず、むしろ離婚推進者・共和国支持者としての悪名が帳消しになるほどの高みに詩人ミルトンを押し上げた (Addison 322参照)。叙事詩というジャンル、同時代・後世どちらの基準で見ても質の高い文体・物語、そして内乱・共和国の混乱が落ちついた王政復古後という出版時期、など諸因が考えられるが、何より、ベームの議論と違って『失樂園』における聖書の扱いが知的かつ穏健・穏便・穏当であること、聖書に記述がないことであっても「これらのできごとは実際ミルトンが描いたように起こったはず」と人が信じてしまうほど正統的なこと、つまりミルトンの描写が詩=虚構でありつつ宗教的現実・真理に近かったこと、を忘れてはならない (*Milton* 1: 155)¹⁸。

17 ここに引用した聖書序文については *Armstrong, Introduction* も参照。このように強い聖書の権威を前提として前述の反聖書主義・反律法主義が内乱期にあらわれたのである (cf. 富樫「ホラティウス」)。

難解・不可解なベーメの著作がなぜ1640-50年代に人気を集めたか、という最初の問いに戻る。以上より二つの答えが導かれるように思われる。まずそれは、ベーメの議論が、「人のなかに神がいる」という16世紀以来抑圧されつつ広まり、内乱・共和国期に社会問題を引き起こした非正統キリスト教思想の一翼を担ったからである。次に、ベーメの描く霊人アダム、肉をもたない人が、実は過去・現在の現実・虚構に広く見られる理想像の一変奏だったからである。ベーメの異端的で虚構的な神学議論は聖書の法的・道徳的・科学的真理・権威に反したが、同時にそれは人体の現実についての日々の関心・不安を体現するもの・想起させるものだった¹⁹。だからこそ、それは内乱・共和国期の混乱の一因となると同時に、より知的な人々の宗教的・道徳的・科学的・日常的興味・関心を惹いたのである²⁰。

引用文献

Addison, Joseph. "An Account of the Greatest English Poets: To Mr. H. S., Ap. 3rd. 1694". *The Annual Miscellany, for the Year 1694, Being the Fourth Part of Miscellany Poems*. London, 1694. Wing D2237. 317-27.

- 18 『失楽園』における食を扱う最近の研究に Emily E. Stelzer, *Gluttony and Gratitude: Milton's Philosophy of Eating* (University Park, PA: Pennsylvania State UP, 2019) があるが、本論考ではこれを参照することができなかった。
- 19 Green およびそこにある引証資料を参照のこと。
- 20 もうひとつベーメの人気要因と思われるのは、上記議論とは裏腹に彼の文章が性的刺激に満ちていることである。神の霊としての「処女」を失った人がイエスによる贖罪によってそれを回復する過程は、割礼・性行為・受胎などとして比喩的に語られる (Turner 145-46)。

以上、わたしが言うことをごく正確に理解してほしい。父が子をつくるように……かつて女が男のなかにいた時に[男の]炎髄液が[女の]光髄液のなかに入っ
てそこで自分を愛したように、男と女がひとつの体になるように、まさにそのように割礼 [≡イエスの死] という炎洗礼が男の炎髄液から飛び出して女のなかの女の髄液に入っていった。男の炎髄液を洗礼したのは神であり、その男の種から男と女があらわれる。こうして男の契約と洗礼が女のなかに、つまり女性質のなかに入った。女の髄液はすでに契約——神の言葉が契約において人となる——の聖なる本質を不毛に宿しており、そこで消えていた処女性が再び甦るのである (*Mysterium* 285-86)。

(……やはりよくわからない文章だ。)

- Armstrong, Robert. Introduction. Armstrong and Ó hAannracháin 1-28.
- Armstrong, Robert, and Tadhg Ó hAannracháin, eds. *The English Bible in the Early Modern World*. Leiden: Brill, 2018.
- Bauthumley, Jacob. *The Light and Dark Sides of God*. London, [1650]. Wing B1165A.
- Böhme, Jakob. *A Description of the Three Principles of the Divine Essence*. London, 1648. Wing B3404.
- . *Genius of the Transcendent: Mystical Writings of Jakob Boehme*. Tr. Michael L. Birkel and Jeff Bach. Boulder: Shabhala, 2010.
- . *Mercurius Teutonicus: Or, A Christian Information Concerning the Last Times*. London, 1649. Wing B3409.
- . *Mysterium Magnum: Or, An Exposition of the First Book of Moses Called Genesis*. Tr. John Sparrow. London, 1654. Wing B3411.
- Boswell, Jackson Campbell. *Milton's Library: A Catalogue of the Remains of John Milton's Library and an Annotated Reconstruction of Milton's Library and Ancillary Readings*. New York: Garland, 1975.
- C[laxton], L[aurence]. *A Single Eye*. London, 1650. Wing C4584.
- Crisp[e], Tobias. *Christ Alone Exalted: In Fourteen Sermons*. London, 1643. Wing C6955.
- Davis, J. C. *Fear, Myth, and History: The Ranters and Historians*. Cambridge: Cambridge UP, 1986.
- Edwards, Thomas. *Gangraena*. London, 1645. Wing E228.
- . *The Second Part of Gangraena*. London, 1646. Wing E235.
- Fallon, Stephen M. *Milton among the Philosophers: Poetry and Materialism in Seventeenth-Century England*. Ithaca, NY: Cornell UP, 2001.
- Firth, C. H., and R. S. Rait, eds. *Acts and Ordinances of the Interregnum, 1642-1660*. London: HMSO, 1911. <<https://www.british-history.ac.uk/no-series/acts-ordinances-interregnum/pp409-412>>. August 17, 2019.
- "Giles Calvert's Publishing Career". *J of Friends' Hist. Soc.* 35 (1938): 45-49.
- Green, Ian. "The Laity and the Bible in Early Modern England." Armstrong and Ó hAannracháin 53-83.
- Hermes Trismegistus. *The Divine Pymander*. Tr. John Everard. London, 1650. Wing H1565.
- Hermetica: The Greek Corpus Hermeticum and the Latin Asclepius*. Tr. Brian P. Copenhaver. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Hessayon, Ariel. "Jacob Boehme's Writings During the English Revolution and Afterwards: Their Publication, Dissemination, and Influence". Hessayon and Apetrei 77-97.
- . "'Not the Word of God': Varieties of Antiscripturism During the English Revolution". Armstrong and hAnnracháin 161-82.
- . "The Ranters and Their Sources: The Question of Jacob Boehme's Supposed Influence". *Antiquarianism and Science in Early Modern Urban Networks*. Ed. Vittoria Feola. Paris: Blanchard, 2014. 77-101.
- Hessayon, Ariel, and Sarah Apetrei eds. *An Introduction to Jacob Boehme: Four Centuries of Thought and Reception*. New York: Routledge, 2014.
- Hill, Christopher. *The World Tuned Upside Down*. London: Penguin, 1972.
- The Holy Bible Conteyning the Old Testament and the New*. London, 1611. STC 2216.

- Hotham, C[harles]. *An Introduction to the Tevtonick Philosophie*. Tr. D[aniel] F[oote]. London, 1650. Wing H2896.
- Hutton, Sarah. "Henry More and Jacob Boehme". *Henry More (1614-1687): Tercentenary Studies*. Ed. Sarah Hutton and Robert Crocker. Dordrecht: Kluwer, 1990. 157-71.
- A *Jacob Boehme Dictionary*. <http://www.jacobboehmeonline.com/yahoo_site_admin/assets/docs/lexicon7.215210906.pdf>. August 17, 2019.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. 2nd ed. 1997. London: Routledge, 2013.
- A Milton Encyclopedia*. 9 vols. Gen. ed. William B. Hunter. Lewisburg: Bucknell UP, 1978-1983.
- Moss, Jean Dietz. "'Godded with God': Hendrik Niclaes and His Family of Love". *Transactions of the American Philosophical Soc.* 71.8 (1981): 1-89.
- Nails, Debra. "The Life of Plato of Athens". *A Companion to Plato*. Ed. Hugh H. Benson. Oxford: Blackwell, 2006. Ch. 1.
- N[iclaes], H[endrik]. *Revelatio Dei*. N.p., n.d. STC 18563.
- P[ordage], J[ohn]. *Theologia Mystica*. London, 1683. Wing P2968.
- Raymond, Joad. *Milton's Angels: The Early-Modern Imagination*. Oxford: Oxford UP, 2010.
- [R]ogers, I[ohn] (John). *The Displaying of an Horrible Secte of Grosse and Wicked Heretiques Naming Themselves the Familie of Loue*. London, 1578. STC 21181.5.
- Ross, Alexander. *The New Planet No Planet: Or, The Earth No Wandring Star*. London, 1646. R1970.
- Smith, Nigel. "Did Anyone Understand Boehme?" *Hessayon and Apetrei* 98-119.
- . *Perfection Proclaimed*. Oxford: Clarendon, 1989.
- Turner, James Grantham. *One Flesh: Paradisal Marriage and Sexual Relations in the Age of Milton*. Oxford: Clarendon, 1987.
- 富樫剛「ホラティウスからロンギノスへ、『幸せ』から『崇高』へ：17世紀イングランドの書簡詩について」(未公刊) 日本英文学会 第91回大会 2019年5月25日 安田女子大学。
- ベーメ、ヤーコブ『解説：神の本質の三原理』第12章(部分) 富樫剛訳 *English Poetry in Japanese*. <<https://blog.goo.ne.jp/gtgsh/e/b2a6b23709eaae48e899e945acff5092>>.